

自然誌的判断と概念の規範性

木本 周平(首都大学東京)

本発表は、現代のアリストテレス主義者が「自然誌的判断 natural historical judgment」とよぶある特殊な命題がもつとされる「ある種の規範性」を考察の対象とし、それをヘーゲル目的論のうちに再構成することを試みる。自然誌的判断への関心は論者によって異なっており、この主題の射程の広さがうかがえる。フィリップ・フットは自然誌的判断が自然のもつ善さと関連するものと考え、そこに人間のふるまいについての道徳的な評価との概念的な同型性をみている。また、マイケル・トンブソンは行為論的な側面から自然誌的判断のもつ未完了アスペクト性に注意を向けている。両者に共通するのは、有機体の特徴やふるまいをとらえる記述がもつ特殊性についての関心である。しかし自然誌的判断は言語的表現だけからは一般的な特徴づけが難しく、数多くの例外も存在する。まずは問題の所在を共有するために、以下で自然誌的判断についてよく言われる説明を提示する。

自然誌的判断のもつ特徴を描くために、トンブソンはしばしば自然のドキュメンタリー番組を例に挙げる。たとえば、カラスの生態についてのドキュメンタリー映像があるとする。そこにはあるカラスのふるまいが映されており、同時に「ハシブトカラスの番は3月になると巣作りを始め、時にはハンガーを巣材に使います...」というナレーションがつく。自然番組でよく目にするこの語りの特異性は、それが眼前の個体についての記述（「このハシブトガラスは...」）ではないという点にある。取材の足りない場面があれば、別の機会に別の個体を前に撮り直して編集してもよい。このようなことが可能であるのは、この語り種についての一般的な言明だからである。トンブソンは自然誌的判断のもつ一般性を「非フレイゲ的一般性 non-Fregean generality」と呼ぶが、これは言語哲学において総称文の特性として理解されてきたものと同じである。先の例で言えば、巣立ってまだ半年程のカラスは番を形成していないことがよくあるので、そのような個体は3月になっても巣作りを開始しないかもしれない。しかしこのような反例の存在にもかかわらず先の言明は真理性を保持する。自然誌的判断の一般性は全称文のそれではないからである。

争点となるのは、自然誌的判断がもつとされる「ある種の規範性」である。これはもちろん道徳的な意味での規範ではない。たとえば「オスのシオマネキは片方の鋏足が大きい」という自然誌的判断を我々がもち、他の個

体と比べて明らかに小さな鋏足の個体があるとしよう。シオマネキの鋏足は求愛行動に用いられ、その点で繁殖行動を含めてこの個体の生に影響を与えることが考えられる。このとき、このシオマネキはその個体的特徴のために「欠陥がある」とか「悪い」と評価される。逆に先の自然誌的判断にかなう個体はその生を十分に発揮するかもしれない。このように、自然誌的判断はその種の特徴やふるまいを事実として一般的に表現しているのではなく、時としてそれはその種の生についての規範的な意味を含むのである。

他方で自然誌的判断が種についての規範性を表現するとは言いがたい事例も多数存在する。「ヘビは毒をもっている」という自然誌的判断があるとしよう。実は毒をもつヘビの種は半数もないので、これはヘビという生物の生を表現しているとは言い難い。むしろそこにある眼目は、この判断が我々の危険予測に役立つという点にあるだろう。こうした判断の場合には、その種の生についての規範性はないように思われる。

トンブソンのように種自体の「生の形式 life form」に関心がある論者であれば、このような「主観的な」自然誌的判断はそもそもその名に値しないものみなすかもしれない。しかし彼自身が着目する自然誌的判断の論理形式が、種自体への言明以外のものも包括していることも事実であるように思われる。この点について啓発的であるのは、ギンズボークのカント論である。彼女はフットらの議論に言及することはないものの、『判断力批判』を以上のような一種の規範的言明を体系的に論じた著作として提示する野心的な仕事をしている（彼女自身はこの規範性を「薄い意味での規範性」と呼んでいる）。その議論を布衍していけば、種の生を表現する客観的合目的判断となるが、他方で「ヘビは毒をもつ」のような判断は人間の認知上の目的にかなう（つまりそのような判断をもっている方が生存しやすい、など）という意味で主観的合目的判断となるだろう。

カントへの言及はやや唐突な印象を与えるかもしれないが、議論のプレイヤー達にとっては的外れでもないだろう。というのも、やはり「アリストテレス主義者」でもあったヘーゲルがアリストテレス的生の把握を再考に値するものとしたのは『判断力批判』であると評価したのだし、またそのヘーゲルが「生命」を論理的なカテゴリーとして掲げたという事実への言及でもってトンブソンの議論は開始するのである。ここで、自然誌的判断を論じる上で、ヘーゲルの『判断力批判』受容という歴史的事情が背景として浮かび上がってくる。本発表の注目点はここにある。その生命論および目的論を自然誌的判断の文脈において再構成する可能性を探る。

文献

Foot, Fillippa, *Natural Goodness*, Oxford University Press, 2001.

Ginsborg, Hannah, *The Normativity of Nature: Essays on Kant's Critique of Judgement*, Oxford University Press, 2015.

Thompson, Michael, *Life and Action : Elementary Structures of Practice and Practical Thought*, Harvard University Press, 2008.

神崎繁「アリストテレス的自然主義の新展開:「自然誌的判断」と「行為の性向」の論理形式」(『理想 特集・アリストテレス』理想社、2016年、pp.62-76.